発達理論の学び舎

Back Number: Vol 176

Website:「<u>発達理論の学び舎</u>」



目次

- 3501. 今朝方の最後の夢
- 3502. 暮れゆく美しい夕日を眺めながら
- 3503. 理解力の低い国語教師に関する夢
- 3504. 珍妙な手紙と隠し通路
- 3505. 理論の例外について
- 3506. 学習動機の変容と人生
- 3507. シャーマンが現れる夢
- 3508. 言語と音楽の呪術的側面に対する関心
- 3509. 見送る夢
- 3510. 学び合いの楽しさ
- 3511. 手紙
- 3512. 今朝方の夢
- 3513. 破壊的創造衝動と実践哲学
- 3514. ピアノそのものを深く知るために
- 3515. 転調の技術と各人それぞれの美的感覚
- 3516. 大きな滝に向かう夢
- 3517. 宙に浮き、木の壁と遭遇する夢
- 3518. 角度を求める問題に解答しようとする夢
- 3519. オランダ人にとっての絵画
- 3520. オリエンテーションに参加する夢

3501. 今朝方の最後の夢

日記を書きに書き、日記のような曲を作りに作る生活。その完全なる実現に向けて毎日が形作られていく。

薄い雲の向こう側には、晴れ間が若干顔を覗かせている。書斎の窓から外を眺めると、半パンと黄色い半袖のシャツを着た男性が、これからランニングに出かけようとしている。その格好はとても寒そうだが、寒さをものともしていないようだ。

一日の活動を始めて、一時間半弱が経とうとしているが、まだ日記しか書いていない。早朝の作曲 実践を含め、その他のことはまだ何も着手していない。だが、それでいいのだと思う。日記を書き留 めることは、自分の人生を真に生きていることの証なのだから。

いつか日記を書くのと同じような感覚で作曲実践が営まれるようになるだろう。さらには、日々自分の内側の感覚を絵に描くことも行っているから、それらがより高度な次元で自由自在に行えるようになれば、自分の人生を様々な方法を用いて深く生きることができるようになるだろう。

今朝方見ていた最後の夢について思い出している。先ほど書き留めたのは最後の夢ではない。も う一つ夢を見ていた。

夢の中で私は、海岸線の道を歩いていた。海岸沿いに植えられた松を隔てたところにその道があり、 無数の松の木の枝の間から太陽の光りが漏れていた。

私は太陽の光を浴びながら、ゆっくりと散歩を楽しんでいた。すると、どこからともなく人の声がしてきた。その声には聞き覚えがあり、以前仕事を一緒にしたことのある人の声だった。その他にも、若い女性と男性の声も聞こえてきた。

以前仕事を一緒にしたことのある人:「う~ん、あの会社は就職にはお勧めできないかな」

若い女性:「それでは、この会社はどうですか?ここはベンチャー企業なので、若いうちから色々な 経験が積めるんじゃないかと思うんです」 若い男性:「いや、その会社は能力の低い人しか集まってこないことで有名だよ」

以前仕事を一緒にしたことのある人:「確かにその会社は、能力の高い人はあまりいないかもしれないが、事業として行なっていることは大きな社会的価値があり、多くの経験も積めるだろうからいいんじゃないかと思うよ」

どうやらそこでは就職相談がなされているようだった。彼らの姿は一切見えず、声だけが聞こえて来る状況だったのだが、以前仕事を一緒にしたことのある人が私に意見を求めてきたことには驚いた。 その場で一応自分なりの考えを伝えたところで夢から覚めた。今朝方見ていた夢は、その夢で最後である。

改めて振り返ると、今日は多くの夢を見ていた。ふと、一つ前に書き留めていた歴史上の人物について閃くものがあった。まさかとは思うが、あの人物は私自身に他ならないのではないか、と思えてきたのである。確かに、今の私はあのような立派な本棚や机はない。だが、机に挟まれていた写真が父と似ているということが、あの人物は自分であるかもしれないと思わせた。アルプスの山頂で嬉しそうに微笑むあの人物の笑顔が今も忘れられない。書斎の中に差し込む太陽の光、そして何よりも、書斎に染み付いていた幸福の香りを忘れることができない。フローニンゲン:2018/12/9(日)09:09

3502. 暮れゆく美しい夕日を眺めながら

時刻は午後の四時を迎えつつある。この季節のこの時間帯はもう夕暮れ時である。

今、太陽が沈みゆく姿をぼんやりと眺めている。こうした光景を眺められることはここ数日間なかったため、とても貴重なことのように感じる。そもそも、太陽の光を浴びたのは久しぶりであったから、それに対しても喜びを感じる。これから日照時間がどんどん短くなっていくため、太陽の光を浴びれる時はその恩恵をできるだけ授かろうと思う。

家の中にいても、カーテンを開ければ光を十分に浴びることができる。これからは光がより一層貴重になる季節になるだろう。太陽が沈む位置も、例えば数ヶ月前と比べてみると、随分と東寄りになっている気がする。こうした方向感覚が正しいのかわからないが、以前であれば、もっと西の空の方向

に太陽が沈んでいたはずである。それが今となっては、書斎の窓からちょうどまっすぐの地点に太陽が沈んでいく姿を見ることができる。本当にそれは今私が座っているところからまっすぐの地点だ。

フローニンゲン上空を覆っている雲がどんどん晴れていく姿を今眺めている。太陽が沈む空の上には最初から雲がほとんどないようであるが、今私がいる町の上空は雲が空を覆っている。それが今どんどんと晴れていく姿が見える。それを祝ってか、今上空に数多くのカモメが飛んでいる。優雅に空を行ったり来たりするカモメをぼんやりと眺め、晴れていく空の向こう側の世界に思いを馳せている。

今日は本当に、「晴れ」というごく有り触れた出来事が、どれほど恵みに溢れたものかを噛み締めることができた。単に天気が晴れているというだけのことなのだが、それがとても祝福に満ちたものに思えて仕方なかったのである。

夕暮れ時に、こうして雲が晴れていく様子を眺めることも多大な至福さもたらす。雲が夕日に照らされる色も、どこか至福さを体現しているように見えてくる。

今日の午後に集中的に座禅をしようと思って座ったところ、これまでよりは短く、結局三時間ほどの 座禅となった。それ以上、座ることを望まない自分がいたため、そこで座ることをやめ、再び日常の 活動に戻った。三時間の座禅中、それなりに意識が深まっていたが、大きな気づきや発見が得られ たかというとそうでもない。強いて挙げるとするならば、気づきや発見を求めて座ることの愚かさぐら いだろうか。とはいえ、身体感覚としてはこの生に対する絶対的な肯定感があったことは確かだ。ま た、細かな気づきや発見があったことも確かであるが、それはとても雑多なことであり、形而下の日 常生活におけるちょっとした気がかりのようなものに関することだった。そうした気がかりはそもそも 仮初めのものであり、囚われることも馬鹿馬鹿しいのだが、一応立ち止まってそれらと向かい、そこ に囚われない形で日常を生きていくのが賢明だろう。

今、フローニンゲンの上空から雨雲が完全に消えた。残っている雲は雨を降らせるような雲ではなく、 どこかとても優しそうな雲である。明日は天気が良いようなので、散歩がてら買い物に出かけようと 思う。フローニンゲン:2018/12/9(日)16:03

3503. 理解力の低い国語教師に関する夢

今朝は五時過ぎに起床し、五時半を迎えたあたりで一日の活動を始めた。今日から新たな週を迎えることになる。今年も残すところ、あと三週間となった。

昨日は、おそらく年内で最後になるだろう接心を行った。三時間ほど座禅をし、心身を整えることを行った。昨日の座禅中には、何か大きな気づきや発見を得ることはできず、その代わりに静けさに終始包まれていた。長時間座ることによって、思考がクリアになることは確かなようだということにも気づいた。

座禅を終え、少し休憩をしていると、やたらと言葉が湧いてくるような感覚があったので、文章を書き留めておいた。また、言葉を生み出したいという衝動のみならず、曲を作りたいという衝動も高まっていたので、作曲実践も行った。

昨日は座禅をしていたこともあり、また午前中にはその他に取り組むことがあったので、作曲理論はあえて一切学習しなかった。一方、今日は作曲理論を旺盛に学習していこうと思う。一日ほどあえて休憩を入れることによって、今日からは再び集中して作曲理論の学習に取り掛かることができるだろう。作曲理論の学習は、確かに自己教育の側面を持つが、それは自分のためだけに行っているのでは決してないように思えてくる。

以前の日記で書き留めたように、自分が何かを学習することは、自己を超えて、即他者や社会に何らかの関与をするためであることがわかる。学ぶのは主体としての自己だが、その学びは自己の所有物になるというよりも、広くこの世界に共有されるためにあるのだと思う。

集中的に座禅をした日の夜は夢を見ないことが多かったが、今朝方はいくつかの夢を見ていた。 夢の中で私は、実際に通っていた中学校の教室にいた。そこでは国語の授業が行われていた。厳 密には、中学校二年生の時の国語を担当していた教師が、道徳の授業か何かをしていた。

教師が道徳上のあるテーマを黒板に書き、そのテーマについて一方的に話し始めた。そこである 生徒が挙手をし、教師に質問をした。 生徒:「先生、その考えは今の社会では難しいのではないでしょうか?今の世の中は、みんなバラバラであり、他人の親が別の子供の面倒を見るなんて難しいのではと」

教室にいた生徒の中で、小学校時代からはっきりと自分の意見や質問を教師に表明できる数少ない友人の一人がそのように述べた。彼の質問に対して、教師は一瞬間をおいて、よく分からない返答をした。教師の返答の出だしからすぐのところで、私はこの教師は友人の問いの意味を全くわかっていないと思った。そこで私は挙手をした。

私:「今の質問は、現代社会の関係性の希薄化の問題を指摘したものだと思います。つまり、先生が述べていた事柄は、一昔前の長屋文化的な家族構造においては通用したことだと思いますが、現代社会に広がっている人間関係の構造を考えると、その考えはあまり当てはまらないのではないか、ということを彼は言いたかったのだと思います」

「そういうことだったのか」というような表情を教師は浮かべ、そこからも何か言葉を足そうとした。そうした様子を見ていると、教師という者は何か生徒に対して教えなくてはならないというような未熟な考えをその教師が持っていることが読み取れたらし、何よりも、どうして彼が述べた質問が示唆する社会構造が一瞬にして理解できないのかに対して、私は理解に苦しんだ。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/10(月)06:09

No.1471: Winter Sunshine

Fortunately, it'll be sunny all day long today. The sunshine in the early morning is very pleasant. Groningen, 10:33, Tuesday, 12/11/2018

3504. 珍妙な手紙と隠し通路

時刻は午前六時を迎えた。外は真っ暗闇に包まれている。天気予報を確認すると、今日も時折小雨が降るようだが、昼前は天気が回復しそうなので、そのタイミングを見計らって近所のスーパーに買い物に出かけようと思う。

明日からはいよいよ最低気温が0度になる。今週の金曜日は、最高気温が1度であり、最低気温がマイナス2度になるようだ。予想していた通り、ここからフローニンゲンの寒さは一気に厳しくなるよう

だ。昨年よりも少々遅い寒さの到来のように思えるため、ここから春に向けて、気温の変化がどのように推移していくのかも気になるところだ。

先ほど書き留めた夢の後に見ていた夢についても記録しておきたいと思う。次の夢の場面では、私 は三人の友人と食卓を囲んで談笑していた。

三人の友人のうちの一人は、違う小中学校に通っており、私たちが所属していたサッカーチームとは異なる市内のチームでキャプテンを務めていた人物である。彼を含めて、私たちは楽しく話をしていた。私の右隣には、小中学校から付き合いのある親友が座っていた。私は彼の奥さんから伝言を受け取っており、それをその場で読み上げることにした。便箋を広げ、そこに書かれている文章を読み上げると、内容が奇妙であり、それでいて思わず笑ってしまうようなことが書かれていた。

私:「『A君(通っていた学校の異なる友人)、夫を守るために、水を飲みながらポテトサラダを食べてください』って書いてある(笑)」

A:「どういうこと? (笑)」

私:「いや、わからん(笑)」

B:「他には何か書いてないの?」

私:「あぁ、まだあるよ。『B君、夫を守るために、中華サラダを食べてください』だって(笑)」

B:「なんじゃそりゃ~(笑)」

私が手紙を読み終えると、食卓の上に、ペットボトルの水とポテトサラダ、さらには中華サラダが突然現れた。A君とB君は、手紙の内容に忠実になって、それらを飲み食いした。

そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私はあるビルの中にいた。私の横には小中学校時代の親友がいて、彼と一緒に何かの説明会に参加していた。その説明会を終えると、彼は私に、「橋を渡った先にあるカフェで今から少しお茶でもどうか」と述べた。私はその提案に賛同し、建物の外に出て橋を渡っていこうと思った。

説明会に参加していた三階から一階までエレベーターで降りようとしていたところ、その友人は何も 言わず二階で突然降りた。橋を渡っていくためには、一階から外に出ていく必要があるはずであり、 「彼は一体何を考えているのだろうか?」と疑問に思った。

とりあえずエレベーターが一階に到着し、建物の外に出てみると、確かにそこからでも橋を渡っていけるのだが、どうも遠回りのような気がした。もしかしたら、彼が降りた二階には近道があるのかもしれない、と私は思った。そこで私は再び建物内に引き返し、もう一度エレベーターに乗った。そして二階に到着した時に、エレベーターの正面ではなく、後ろの壁が突然上に開いた。

そこには隠し通路が存在しており、やはり橋の向こう側へ近道できるようだった。エレベーターの先の空間は、仕切りで囲まれた迷路のようになっていた。ただし、それは人を迷わせるような迷路ではなく、一つの方向にしか進めないようになっていたから、迷いようもなかった。しばらく歩いていくと、遠くの方に友人の背中を見つけた。

私は歩く速度を上げて彼に追いつこうとした。すると、私の右横から誰かが話しかけてきた。見ると、日本のある空調メーカーの社員のようであり、自社製品の空調に関する説明を私にしようとしてきた。 私は一瞬その場に立ち止まり、少しだけその人物の話を聞こうと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/10(月)06:38

No.1472: A Ramble of a Clown

A dark night came. It is very quiet outside. I'll continue to work after dinner and to study composition theory again. Groningen, 18:07, Tuesday, 12/11/2018

3505. 理論の例外について

時刻は午前八時を迎えた。空がダークブルーに変わり、もう少しで夜が明けそうだ。先ほど突然雨が降り出し、今はまた雨が止んでいる。一日の始まりを静かに祝いたいと思う気持ちに包まれる。

昨夜就寝前にふと、今年客員研究員として大学に所属しなかったのは、作曲理論を集中的に学ぶためだったのではないかと思った。当初の予定では、米国の大学に客員研究員として所属することを考えていたのだが、条件が合わず、その話は白紙となった。仮に研究員として大学に所属してい

たら今のような生活はなかったように思える。日々の探究活動と創造活動をこれだけ旺盛に取り組むことができているのは、今年もオランダに残ったからだと思う。やはり人生の一つ一つの出来事には、何かしらの意味が内包されているようだ。

今日はこれから、作曲理論の学習に取り掛かる。昨日は作曲理論の学習をしなかったためか、今日はいつも以上に学習に取り組む情熱に溢れている。作曲理論を学習することに合わせて、午後には作曲実践も行っていく。画家が過去の偉大な画家の絵を参考にして絵を描いてみることによって、画法を徐々に身につけていくように、過去の偉大な作曲家の曲を参考にしてひたすら曲を作っていく。これを少なくともここからの数年間継続していく。そうした修練の先に、自分なりの作曲語法が確立されるだろう。

画家について言及したところでふと、そういえば昨日、絵画では描いた線がミスだとみなされること はあまりないが、作曲上は一つの音符の置き間違いが明確にミスとみなされることがよくある、という ことについて考えていた。音楽理論が数学的な厳密さを求めているからこうしたことが起こるのだろ うか。私が気になっていたのは、絵画の技法にも理論体系があると思うのだが、それがどのような性 質を持っているものなのかということだった。どうも音楽理論とは性質が異なるように思えてくる。

ここ最近音楽理論を学びながら思うのは、これまで作ってきた曲、そして現在作っている曲には、何かしらのミスが内包されている場合が多いだろうということであり、音楽理論の知識がまだ脆弱であるため、そうしたミスに気づけないでいることだ。一方で、確かに音楽理論の観点からミスに思えるものの大半は本当にミスなのかもしれないが、それがミスではないとみなされるケースもあるのではないかと思う。それは、各人の美的感覚に通じるテーマであり、音楽理論上はミスだとみなされる場合においても、それが響きの美しさを持っていることも十分にあり得る。

理論の例外というのは、一つの音を取り巻くダイナミックな文脈によって生まれるものなのかもしれない。基本的に音楽理論では、響きが汚くなってしまう音を生み出さないようにすることを原則に掲げているが、音の響きというのは、言葉と同じように常に文脈によってダイナミックに変化するものであるから、音を取り巻く文脈にも敏感になっていく必要があるだろう。おそらく、そうした感性を育まなければ、理論の外に出て自由自在な境地で曲を作れるようには一生ならないだろう。そのようなことを思う。フローニンゲン:2018/12/10(月)08:17

3506. 学習動機の変容と人生

時刻は午後の七時半を迎えた。本日最後の日記を書き留めておきたい。

今日は午前中に、ひょうのつぶてが空から降ってきた。ひょうが激しく窓ガラスにぶつかる音が聞こえてきた時、書斎の窓から外の通りを眺めてみると、杖をついた白髪のおじいさんが、傘も差さずに大の散歩をしている姿を見かけた。その後すぐにひょうは止み、その小雨と同時に太陽の光が地上に降り注ぎ始めた。天気雨が地上に降り注ぐ様子は、とても美しかった。輝く小雨を眺めながら、午前中の作曲理論の学習に取り掛かっていたことを思い出す。

今日は一日を通して、大いに作曲理論を学習した。学習も随分とはかどり、テキストのまとめノートが完成するまであと少しである。それは来週の頭には完成するだろう。作曲理論の学習をしていると、こうした学習のみならず、その他の領域に関しても、学ぶことをやめてしまうことは、社会へ奉仕することを放棄することに等しいのではないかと思えてきた。

昨日も書き留めていたように思うが、自らに課す教育は自らのためだけのものではなくなった。もしかすると、教育とは最初からそのようなものなのかもしれない。確かに教育は、自己を深め、自己の能力を育んでいくことに資するものであるが、そこで終わりではない。それよりも先の目的として、教育とは本来、個人の育成を通じて私たち自身が社会に関与していくことを促すためにあるのだと思う。

小さな自己に囚われた学習衝動はもはやなくなった。今の自分の内側に息吹いているのは、自己を超えた世界全体への関与をしていくための学習衝動である。そのように自己超越的な衝動でなければ、今のように没入的に学習を進めているはずはない。人は自己を深め、成熟の道を歩いていくと、諸々の動機が変容していくと言われるが、まさに学習動機に関する変容を自分の内側に見ることができる。

昼食前に一度小雨が止み、そのタイミングを見計らって、近所のスーパーに買い物に出かけた。外に出てみると、空気が冷たくなっていることにすぐに気づいた。小雨が止んでからは、太陽の光が 差し込む時間帯も多く、久しぶりに太陽の光を浴びることができ、大変心地よかった。太陽が見える 時は、散歩がてら買い物に出かけるようにしたい。北欧に近いこの地においては、冬の時代における太陽の光は貴重である。太陽の光を浴びることは、精神衛生上、必要なことかと思う。

明日からは一気に気温が下がるようであるから、寒さ対策をしていこうと思う。数週間前に一度気温が随分と下がる時があり、その際には湯たんぽを使っていた。今日からも再び湯たんぽを使って、お腹や足先を暖めながら寝ようと思う。

就寝までまだ時間があるから、もう少し作曲理論の学習をしたい。一日一日、小さく学習と実践を積み重ねていく。それはいつか巨大な構築物になる。日々は創造的な産物であり、人生もまたそうである。自分が人生を創造し、人生が自分を創造していく。今、ようやく自分自身が自分の人生になったように感じる。フローニンゲン:2018/12/10(月)19:45

3507. シャーマンが現れる夢

昨夜は就寝の直前まで作曲理論の学習をしており、少々学習しすぎの感があり、今朝はとてもゆっくりと七時半に起床した。キリの良いところまで学習しようと思っていたら、結局就寝前の時間まで学習をしていた。就寝した時間そのものはいつもとあまり変わらなかったのだが、やはり就寝の直前まで頭を使いすぎてしまうと、回復のための睡眠時間が長くなってしまうようだ。これは以前からもわかっていたことなのだが、学習を始めるとついついそのようなことを忘れてしまう。

今日からは、就寝前は数十分でいいので、必ずリラックスする時間を確保したい。学習や仕事を行 うのは午後の九時までとする。九時以降はできるだけリラックスし、10時に就寝することを徹底してい きたい。起床時間が遅かったこともあり、一日の活動を始めたのは午前八時であった。今、ダークブ ルーの空が明るくなってきて、もう少しで日の出を迎える。

今日の最高気温は8度であるから、まだそれほど寒くはないのだが、最低気温は0度であり、明日からは最高気温が徐々に0度に近づいていく。徐々に冬が深まっていくのを感じながら、自分の取り組みを前進させていきたい。

いつものように、今朝方の夢について振り返っている。大きく分けると二つの夢を見ていたが、少々 記憶が曖昧になりつつある。とりあえず、覚えている範囲のことを書き留めておく。 夢の中で私は、あるホテルの広い一室にいた。大きなベッドが二つ置かれており、部屋には何人か 人がいた。見ると、小中学校時代の友人が二人と、外国人が四人いた。外国人は男女それぞれ二 人ずつであり、その中にはどこか見覚えのある人もいたが、名前が思い出せなかった。四人のうち 一人はシャーマンであり、彼はシャーマニズムの儀式に精通しており、これからシャーマニズムの儀 式を行おうと提案してきた。

私たちは特にすることもなかったことと、シャーマニズムの儀式がどのようなものかに関心があったので、儀式を行ってもらうことにした。すると、シャーマンはそばにいた外国人に薬草のようなものを渡した。なにやらそれをまず食べる必要があるとのことである。その後、シャーマンは注射器を取り出し、薬草を食べた外国人の状態を窺いながら、注射を打っていいかどうかを確認した。

そこで私は、それは何らかの薬物なのではないかと思った。私の隣にいた一人の友人は、それをとても恐れていた。一方で、もう一人の友人は特に気にとめることもなく平然としている。シャーマンはそっと小さな注射器の針を男性の指に刺した。それを見たとき、腕ではなく指に針を刺すというのは不思議だなと思った。

しばらくすると、何らかの薬物を投入された男性は、少しばかり穏やかになり、ベッドの上で仰向きになりながら別の意識世界に入っているようだった。シャーマンの男性に聞くと、それはある特殊な植物から採取されたエキスのようだった。詳しく話を聞くと、それには意識を変容させる作用があるようだが、程度としては強くないそうだ。シャーマンの男性は、私の友人にもそれを勧めたが、先ほどから平然としていた友人の一人は「これから本を読みたいので遠慮しておく」と述べた。

残りの外国人は、注射器ではなく、エキスの原液を小さなコップに入れて、そのまま飲むことをしていた。私はふと横を見ると、先ほどまで不安げな表情を浮かべていた友人の一人が消えており、部屋の中で正常な状態でい続けていたのは、私ともう一人の友人、そしてシャーマンだけだった。

残りの外国人が全員ベッドの上で仰向けになっているのを眺めていると、シャーマンが「そろそろ出発しよう」と述べた。その言葉を聞いて、私たちはホテルの部屋から外に出て行こうとした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/11(火)08:26

No.1473: Before Dawn

The outside world is gradually becoming bright. Although today's temperature is low, I'll engage in my activities with passion as usual. Groningen, 08:08, Wednesday, 12/12/2018

3508. 言語と音楽の呪術的側面に対する関心

シャーマンが現れた今朝方の夢について振り返っていると、そういえばこれまで何回か夢の中でシャーマンに遭遇する夢を見ていたことに気づいた。今年に入ってそれは二回目であり、昨年か一昨年にも一度中南米の古代遺跡でシャーマンに遭遇する夢を見ていたことを思い出した。

今から七年前にジョン・エフ・ケネディ大学(JFKU)の統合心理学科に在籍していた時、そこで履修したコースの一つにシャーマニズムに関するものがあり、JFKUのバークレーキャンパスでシャーマニズムの儀式に参加したことがある。それ以降、シャーマニズムに関する書籍を何冊か読むなどしていたが、それが私を強く捉えたかというと、そうでもない。単純に、人間の意識を探究するにあたって、シャーマニズム的なものを学ぶのは必須であるという認識のもと、最低限それについて知ろうという程度の気持ちで関連文献を読んでいた。

とはいえ、今になっても時折シャーマンが現れる夢を見るというのは、どのような意味を持っているのだろうかと考えざるをえない。正直なところ、今このようにして書いている文章のように、人間の言語にはシャーマニズム的な何かがあり、今聴いている音楽にもまさにシャーマニズム的な何かがある。言い換えると、言語や音楽には呪術的な作用が内包されているということだ。特に、言語の呪術的な側面については以前から関心があり、ニューヨークに住んでいた時に、通勤時間に井筒俊彦先生の"Language and magic: Studies in the magical function of speech (1956)"を熱心に読んでいたが、本書はまさに言語の呪術的側面を詳述しているものである。

ここ最近は言語のそうした特性のみならず、音楽にも感情を変容させたり、意識そのものを変容させる力が存在していることに気付き始め、それについても関心を寄せている。もしかすると、現在日々日記を書き留め、曲を作っていることの中に、今後は呪術的な何かを統合していく実践を入れていくかもしれない、ということを思う。文章や曲そのものが治癒的作用と変容的作用を持つようなことに

なれば、それは意義があるように思えてくる。今朝方見ていたシャーマンが現れる夢は、自分がそう した方向に向かって歩みを始めようとしていることを示唆しているのかもしれないと思う。

時刻は八時半を過ぎ、辺りはすっかり明るくなった。今日は一日を通して晴れるようだ。空には雨雲はなく、薄い雲が浮かんでいる程度である。昨日も太陽の光を少々浴びることができたが、今日はよりその時間が多く取れそうだ。

今日はこれから、いつものように早朝の作曲実践を行い、その後、作曲理論の学習を進めていく。 昼食後には、協働者の方たちとの勉強会があり、その予習はすでに一昨日の段階で終わらせているので、勉強会の開始前に簡単に今日の講義の大枠を確認しておきたい。十分な睡眠を取ったこともあり、今日のこれからの活動は気力に満ちたものになるだろう。フローニンゲン:2018/12/11(火)08:44

No.1474: A Little Dance of Stratosphere

It's 5PM now. I can see a beautiful sunset reflecting the clearness of stratosphere. Groningen, 16:54, Wednesday, 12/12/2018

3509. 見送る夢

もう少しだけ日記を書き留めてから本日の活動を行いたいと思う。一点目としては、先ほどの日記で書き留めていたように、言語や音楽が喚起する呪術的な力については今後も関心を持って探究していこうと思う。どのような言葉や音楽に呪術的な力が宿るのかを探究していく。別の表現で言えば、どのような種類の言葉や音楽に、どのような種類の治癒と変容の作用が生まれるのかを探究していく。

今日はこれから作曲実践を行うが、そうした観点を持っておきたい。つまり、自分が産み出した曲の中に、どのような治癒や変容の作用があるのかを探っていくということである。今の自分の作曲技術の段階を考えると、自分の曲に治癒や変容を促すものが含まれているかは定かではないが、一つの曲は私たちに何かを喚起させてくれることは間違いなく、喚起されてくるものが何かをまずは分析していく。そして、それがいかように生み出されたのかについても、できるだけ分析的な視点を持ち

たい。そうした地道な分析を続けていくことによって、少しずつ曲が何かを喚起する力が高まっていくのではないかと思う。そして今後は、喚起させるものを意図的に選択し、それを意図的に生み出すことができるようになってくるかもしれない。そうなれば、確かにシャーマン的だと言えなくもない。

シャーマニズムの儀式で行なわれていることそのものは曲作りとさほど関係ないかもしれないが、 シャーマンが喚起する諸々の意識の状態については参考になることがあるだろう。いや、もしかす ると、儀式の方法そのものにも何か曲作りに関するヒントがあるかもしれない。今はあまり認識の制 限をかけずに、開かれた認識でそれらを参考にしていこうと思う。

今朝方見ていた夢はシャーマンに関するものだけではなく、他にもまだ夢を見ていたことを思い出す。夢の中で私は、日没後すぐの時刻あたりの時間帯に、ある道路の上にいた。道路には一台の車が止まっており、車の中を見ると、私の両親と母方の祖母、そして見知らぬ女性が助手席に座っていた。より厳密には、運転手も見知らぬ人であり、車の後部座席に両親と祖母が座っていた。

しかし奇妙なことに、父と祖母は話ができないようであり、母だけが言葉を話すことができた。とはいえ、母も多くをしゃべることができないようであり、私はひとことふたこと、母の言葉を聞いた。どうやら私は、両親と祖母をどこかに送り出しているようだった。辺りはまだ暗闇に包まれているわけではないが、どこか薄暗い。

いざ車が発進しようとしたところで、私は助手席に座っている人物に話しかけた。そして、一枚の券を差し出した。それは、東京かどこかの大都市で、一日中買い物が無料で行えるというものだった。 飲み食いも含め、ありとあらゆる消費財が無料でもらえるという券を手渡し、目的地に着いたら両親か祖母に渡してほしいと述べた。

すると助手席の女性は、この券はあまり良くない贈り物だと言う。そして、そもそもこの券をどのように 入手したのか尋ねてきたので、私は会社名を述べ、その会社からもらったと述べた。その会社は大 手の会計事務所なのだが、その女性はその会社をチョコレート会社だと勘違いしているようだった。 私は一応彼女の誤解を解きながらも、結局その券を渡すことはなかった。

助手席の窓が自動で閉められていき、車が静かに発進した。私は車の後ろ姿を少しばかり寂しげな気持ちで眺めていた。フローニンゲン:2018/12/11(火)09:09

3510. 学び合いの楽しさ

時刻は午後の四時を迎えた。早朝に日記を書き留めてから、今に至るまで、何も文章を書き留めて いなかったので、一旦ここで日記を書き残しておく。

今日は一日を通して本当に良い天気であった。今はちょうど夕暮れ時であり、夕日が西の空に沈んでいく様子を眺めている。遠くの空の上には飛行機雲が輝いて見える。一日を通して晴れであったことは、今日の活動を推し進めていく活力になっていたように思う。今日は午前中に、作曲理論の学習を進め、午後から夕方に至る今にかけてもそれを行っていた。特にハーモニックマイナースケールについて学習をしていた。このスケールは、ナチュラルマイナーやメロディックマイナーよりも研究が進んでいないそうであり、まだまだ探求の余地がありそうだという印象を受けた。

今私は、改めて日本語で音楽理論を学び直しているが、その中で、カタカナ表記すると極めて複雑な印象を持たせるものが多いことに気づいた。例えば、先ほどまで、「スーパーロクリアン・ダブルフラットセブンス・スケール」についてまとめノートを取っていたが、改めてその名前を見ると、なんだこれはという名称で思わず笑ってしまう。こうしたカタカナ用語が乱立する領域の学習を今進めている。おそらく、学習が進めばそれらの奇妙な用語も馴染み深く感じるようになるのだろう。そうした慣れが学習によってもたらされることは興味深い。そうした用語が付された概念を実際の作曲実践の中で活用すればするだけ、親しみのあるものになっていくだろう。本日学んだ、「スーパーロクリアン・ダブルフラットセブンス・スケール」がいつ自分にとって親しい存在になるのかは楽しみの一つである。

今日は作曲理論の学習以外にも、昼食後に、協働者の方たちとオンラインを通じて、成人発達理論に関する勉強会を行っていた。全四回のうち、今日が第二回目であった。教材として扱っているのは英語の論文なのだが、改めてこうした論文を題材にして勉強会を行うことには意義があるように思えてくる。そもそも、成人発達理論を学ぼうにも、日本語で記述された文献が少ないため、英語の書籍や論文から直接的に成人発達の知見を得ていくことは有益だろう。

勉強会に参加している方々は、経験豊富な実務家であるから、そうした方たちと学び合いをするの は私にとってもとても面白い。実は今から五年前に、ジョン・エフ・ケネディ大学を卒業した直後に、 カリフォルニアの州立大学の講師として働こうかと思っていたのだが、結局その道を歩むことはなく、 今も学術機関で教えるということはない。だが、こうした勉強会をしてみて思うのは、自分は講義を 受け持つことや、他の人たちと学び合うことを案外好んでいるのかもしれない、というシンプルな気 づきが得られた。そのような気づきが得られ、世界中の大学を講師として転々としている姿を想像し ていた。フローニンゲン: 2018/12/11(火)16:26

3511. 手紙

時刻は夜九時を迎えた。今日の活動はここでおしまいにしようと思う。

つい今しがた、明日の午前中に行われるオンラインミーティングに向けた資料のレビューを終えた。 現在協働開発中のプログラムが徐々に形になりつつあることを嬉しく思う。合計で三つの資料をレビューし、文言に関して細かな気づきがあったので、それらをメモしておいた。これにて本日の活動を終え、早朝の日記で書き留めていたように、ここからは少々リラックスしようと思う。

闇夜が訪れるのが早くなり、それに応じて、静かな世界が広がる時間が多くなっているように思う。 今も闇と静寂さが辺りに広がっている。

今日は昼食後の勉強会と明日のミーティングの準備を除き、それ以外の時間は作曲理論の学習と作曲実践を行っていた。今日は計画通り、ハーモニックマイナーについてのまとめノートを取り終えた。明日はメロディーに関する学習をしていく。ここからテキストの山場として転調と調性を脱却した曲作りに関するテーマがある。それら二つの項目をまとめていくことは分量があるが、それらを学ぶことはとても楽しみである。それらの項目に関するまとめノートを作ったら、テキストのまとめはほぼ完成したと言っても過言ではない。一旦まとめノートが完成したら、ノートを何度も読み返していく。

その際には、MIDIキーボードを用いて実際に音を出していくことも忘れずに行う。身体を通じた学習を心がけ、知識項目の理解を身体感覚にまで浸み込ませていく。こうした学習を何度も何度も繰り返すことによって初めて、知識が実践に足りうるものになっていく。知識を意識せずとも活用できる段階になれば、知識が真に身に付いたと言えるだろう。

今日は夕方にふと、このようにして日々探究活動と創造活動に打ち込めていることに感謝の念を持った。そのような環境に身を置いていることの有り難さ。日々をそのようにして生きていける幸運に感謝の念を捧げた。私はこれからも喜んで探究活動と創造活動に励んでいくだろう。探究と創造に打ち込む恵まれた環境が授けられているのであるから、その役割を率先して引き受けていく。その過程で学んだことを絶えず社会に還元していく。

人生においてもっとも無駄なことは、カネと知識を蓄えたまま死ぬことである。それらは社会に還元されて初めて意味を持つ。

今日も日記を綴り、日記のような曲をいくつか作った。表面上そのように見えないかもしれないが、 毎日生み出す日記も曲も、この世界のどこか遠くにいる誰かに向けた手紙のようだ。

明日私は何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作るだろう。

明後日は何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作るだろう。

文章を書いて、曲を作った後に何をするのだろうか?また文章を書いて、曲を作る。

その後に飯を食べたら何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作る。

その後に風呂に入ったら何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作る。

そこで疲れが出たら何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作ってから寝る。

寝て起き後に何をするのだろうか?文章を書いて、曲を作る。

そのようにして人生が過ぎ、人生が終わりを迎えたら何をするのだろうか?代わりの誰かが文章を 書いて、曲を作る。

この人生における毎日が、この世界の誰かとのつながりの中で、絶えずお互いの人生を深めていく ことにつながっていると思いたい。そのためには、読み手の不明な手紙を膨大な量書き続けていく 必要がある。この人生において自分にできることは、手紙を書くことしかなくなった。それを人生の 最後までやり通すことができれば、この人生には意味があったと思えるかもしれない。フローニンゲン:2018/12/11(火)21:16

3512. 今朝方の夢

今朝は五時半に起床し、六時から一日の活動を始めた。昨夜は計画通り、九時頃には一日の活動を終え、そこから就寝までの時間はリラックスしていた。そのおかげもあってか、快眠を取ることができた。

幸いにも、今日も天気が良いようだ。今は辺りは闇に包まれているが、あと二時間ほどしたら夜が明けて来るだろう。今日から土曜日にかけて天気は良いようなのだが、気温は徐々に下がっていく。今日の最高気温は4度、最低気温は0度とのことであり、明日の最高気温は3度、最低気温はマイナス2度となる。

日曜日から来週の火曜日にかけて、気温は少し暖かくなるが、その代わりに小雨が降るような天気となるそうだ。フローニンゲンの冬の時期の降水量は多くないことを考えると、今は少し天候が変動的であり、本格的な冬を迎える前段階にあるのかもしれない。天気について考えながら、同時に今朝方の夢について思い出していた。今朝も印象に残る夢を見ていた。

夢の中で私は、ある美術館の中にいた。それは日本の美術館であり、その美術館には美しい庭園があることで有名だ。美術館の作品を全て見終えた私は、館内を後にしようとすると、そこで前職時代にお世話になっていた男性の知人と遭遇した。立ち話もそこそこに、その方から、「今からご飯でもどうか?」と提案を受けた。

私はその方を慕っていたから、その申し出を有り難く思った。その方の行きつけの居酒屋が美術館のすぐ近くにあるようであり、私たちはそこに向かおうとした。すると今度は、前職時代にお世話になっていた女性の知人がやってきた。男性の知人の方と同様に、その女性の知人の方も、一緒に飲みに行くことが多かった仲であり、男性の知人の方はその女性の知人の方もご飯に誘った。すると、その女性の知人の方が深刻な表情を浮かべながら、「加藤君の友人が逮捕された」と述べた。私は一瞬耳を疑ったが、話によると、小中学校時代のある友人が、他人の家に不法進入し、何もせずただ

寝室に立っていたそうだ。その知らせを聞いた時、私はその友人の昔の様子を思い出していた。そ こで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、ある閑散とした道を私は歩いていた。すると、住宅地に行き着き、ある住宅の 庭で朝食を食べている人たちの姿を見かけた。彼らは、庭にテーブルを出し、そこで美味しそうに ご飯を食べている。見ると、そこには両親がいて、母方の祖母もいた。そして、私の高校時代の友 人が一人いた。しかし、その友人はどこか私よりも随分と年齢が上のように思えた。

祖母が私に気づいたようであり、声をかけてきた。なぜだか知らないが、祖母は発達理論に関心を持っており、人間の発達に関して一つ私に質問をした。その質問に対し私は、「おばあちゃん、それはスキャフォールディングというやつだね」と述べた。すると祖母は、「スキャフォールディング?それは何?」と尋ねた。その質問に対し、私は簡単に回答を述べた。

祖母の質問に答えるとすぐに、父から「ワインを飲みながら一緒に朝食でもどうか?」と声をかけられた。私は「これから勉強したいことがあり、朝からワインは飲めない」と述べた。すると父は残念そうな表情を浮かべながら、「そうか・・・」と述べた。私は本当に勉強したいことがあったので、朝食を一緒に食べることをせずに、その場から立ち去っていった。

少し歩みを進めたところで、随分と歳が離れているように思えた高校時代の友人が、私が朝食を一緒に食べないことに小言を述べているのが聞こえてきた。それは随分と私を蔑むような発言であった。そこで私は引き返し、彼に一言強く述べておくことがあると思い、空に浮かび、距離にして10メートルほど離れた先ほどの庭に向かった。私は上空から彼の頭に蹴りを入れようと思ったが、それは少しばかりためらわれたため、彼の頭を足でコツンと叩くと、彼は驚いた表情で私の方を見上げた。

彼は、私が勉強するという理由のためにその場を去ったことをよく思っておらず、何か嫌味を述べていたことを再度私は思い出した。彼の横に降り立った私は、彼の顔に熱い味噌汁をかけた。その味噌汁は火傷してしまうほどの熱さだったが、私は小さな器に入った味噌汁だけでは足りないと思い、鍋に入った味噌汁全てを彼の頭の上から被せた。味噌汁をかけられて右往左往している彼を鎮めるために、私は彼の後ろに立ち、右から一発、左からもう一発、後ろに立っているために少々難しかったが、最後には顔面に一発パンチを食らわせた。そこで夢から覚めた。夢から覚めた瞬間に、自分

の枕を右から一発、左から一発、枕の面を思いっきり殴っている自分がいた。フローニンゲン:2018/12/12(水)06:43

No.1475: The Serene Early Morning

The sky above Groningen today is very clear. I'll devote myself to my lifework, seeing such a beautiful sky. Groningen, 08:48, Thursday, 12/13/2018

3513. 破壊的創造衝動と実践哲学

今朝方の夢について書き留めた後、今朝の夢の後半部分では、随分と自分の攻撃性が現れていると改めて思った。それは自分の内側に根ざす攻撃衝動、ないし破壊衝動の類だろう。これまでの夢を振り返ってみたときに、ある個人に対してそうした衝動をぶつけることが多いのだが、つい先ほどコーヒーを入れに書斎を離れたときに、そうした衝動が社会に対して向かったことが一度もないことに気づいた。

夢の中の攻撃対象は個人ばかりであり、より大きな存在に対して自分の破壊衝動が向けられることはない。おそらくそれは、「まだない」というだけであって、これからそうした夢を見るかもしれないと思った。というのも、顕在意識下の自分の関心は、欧州での生活の日々が進むにつれて、社会の構造的な問題に向かいつつあるからだ。実際に、昨夜は就寝前に、教育を取り巻く社会の構造的な問題や人間発達を取り巻く企業社会の構造的な問題について考えを巡らせていた。

ここ最近の私は、個別事象の研究に対して、もうそれほど関心を持っておらず、そうした個別事象を 生み出しているより大きな構造的な問題に意識が向かうようになっている。顕在意識下では、より大 きな問題へと関心の矢が向かっており、その背後には、自分の無意識の中に健全な破壊的創造衝 動があるように思える。

既存の問題を解決するためには、ある種の破壊と創造が不可避であり、それを行おうとする衝動が 自己の中に根付いていることに最近気づくようになった。一方で、集合的な問題の解決に向かおう とする自分がいるにもかかわらず、夢の中の私は破壊的創造衝動を社会などの集合的な存在に向 けることは未だないことを不思議に思う。さらには、夢の中で発揮されているのは健全な破壊的創 造衝動ではなく、幾分治癒が必要な単なる破壊衝動であって、しかもそれが個人に対して発揮されていることを考えてみる必要があるように思う。治癒されるべきではないシャドーが自己の内側にあることを知っているが、個人に対して発揮される単なる破壊衝動はおそらく治癒が必要だろう。今朝方の夢を振り返りながら、そのようなことを考えていた。

今、一日分のコーヒーが出来上がった。今日は気温が低いから、暖かいコーヒーの旨さが一段と増 すに違いない。

昨夜は就寝前に、ベッドの上に座って、一人でブツブツと独り言を述べていた。それは幾分スピーチのようであった。そこで話されていたのは、上述した事柄であり、具体的には教育や企業社会を取り巻く社会的な問題に関する内容だった。しばらく自分の考えをブツブツと述べた後に、枕元に置いているメモ帳に考えを走り書きしていた。

改めてそれを眺めると、そうした社会の構造的な問題に取り組む際には、哲学の枠組みが必要不可欠であり、それは科学以上に重要である、というものだった。問題の解決に向けてなされるありとあらゆる実践や科学的な営みを根底で支えているのは、思想的なパラダイムであり、既存の問題を真に解決していくためには、その根底にある思想的なパラダイムを変容させていく必要がある、ということを示唆するメモが残されていた。

実践を取り巻く思想を変容させ、実践そのものが変容していくためには、様々な領域において新たな哲学的な枠組みが必要なように思えてくる。今の私が諸々の哲学領域に関心を持っているのは、そうした考えがあるからだろう。社会の構造的な問題を治癒していくためには、科学的な研究では全くもって役不足である。そうした科学的な研究が営まれるための土台となる思想そのものに関与していく必要が大いにある。それによって科学的な研究さらには各種の実践が変容していくだろう。そうしたことを可能にするのが、まさに実践哲学と呼ばれるものなのだと思う。フローニンゲン:2018/12/12(水)07:10

No.1476: Fluctuation of a Winter Wind

Now it is approaching 6:30PM. I'm feeling that time flies. Groningen, 18:18, Thursday, 12/13/2018

3514. ピアノそのものを深く知るために

時刻は午後の一時を迎えた。先ほど昼食を摂り終え、過去の日記の加筆修正を行っていた。

これから仮眠を取り、午後の活動を始めていこうと思う。今日は午前中に、協働プロジェクトに関するミーティングを行った。今日も実りあるミーティングの場であったと感じる。

ミーティング後にメールを確認すると、来月末に世に送り出される書籍の表紙のカバーデザインの 候補に関するメールが届いていた。送っていただいた四つの候補案を見ると、どれも素晴らしい表 紙なのではないかと思った。今回も美しい良い装丁を施してくださったことを有り難く思う。四つの 候補案のうち、自分が良いと思うものに一票投じた。そのデザインが採用されるかどうかはまだ分か らず、どのデザインが採用されるのかが楽しみだ。

昼食前に、作曲理論の学習も少々行っていた。午後は本格的に学習を行っていく。今日の主要テーマはメロディーである。メロディーに関する章のまとめノートを作ったら、転調に関する次の章の学習も進めていきたいと思う。

現在読み進めている書籍の中で、転調に関する章は二番目に分量があり、読み応えがある。同時に、転調の技術をより高めていきたいと思っていた私にとって、ここからの学習はより一層楽しみとなる。作曲理論と並行して、今日はシベリウスを含めたフィンランドの様々な作曲家のピアノ作品が収められた楽譜を開き、その中から一つの作品を選び、それを参考にする形で作曲をしていく。

今日は思っていたほどに太陽の姿を拝むことができず、むしろ今のところずっと曇り空である。そう した天気が醸し出す感覚を曲として表現していきたいと思う。

昨夜就寝前に、現在ピアノ曲に特化して作曲を行っていることもあってか、ピアノそのものについてより深く知りたいと思った。以前どこかの音楽院が提供するMOOCの登録をしたはいいものの、その講座を視聴することを結局していなかったことに気づく。今夜あたりから、就寝前の休憩時間に、リラックスしながらそのMOOCを視聴していこうと思う。間接的に作曲に役立ってくれればという思いがあるが、それ以上に、純粋にピアノという楽器に興味があるというのが正直なところだ。

これまで様々な音楽関係の博物館や記念館を訪れる中で、過去の様々なピアノを見る機会があったが、ピアノを見る観点が不足していたため、そこから学びを得ることは少なかったように思う。これから少しずつピアノそのものについて知ることを続けていき、今後音楽関係の博物館や記念館を訪れた際には、そこに置かれている歴史的なピアノから色々なことを学び取りたいと思う。フローニンゲン:2018/12/12(水)13:22

3515. 転調の技術と各人それぞれの美的感覚

時刻は午後七時半を迎えた。本日の活動時間も残すところ一時間半となり、九時から少々リラックスをして、10時には就寝しようと思う。日記の執筆や読書、そして作曲実践や協働プロジェクトなど、複数の領域を一日の中で往復していると、あっという間に時間が経つ。早朝の六時や六時半頃からいつも活動を始めるのだが、そこから夜の九時までは疲労感を感じることなく、ただ充実感の中で時間を過ごすことができている。

自らの人生を真に歩むようになってから、全ての活動が充実感をもたらすものに変容し、絶えず幸 福感を感じながら時間が過ぎていく。今日もそのような一日であった。

今からちょうど二時間半前に、成層圏の輝きを反射した美しい夕暮れを見ることができた。夕方の空には雲ひとつなく、空が幾層もの異なる色として顕現していた。今改めてその美しさを思い出している。

本日の作曲理論の学習においては、メロディーと転調について学んだ。メロディーの創出も転調の技術も本当に奥が深い。とりわけ今は転調の理論に強い関心を持っている。例えば夕方に見た空の美しさを表現するときに、転調の技術は不可欠だろう。

画家が異なる色を用いながら絵を描いていくように、音楽上の各調は異なる色を持っている。そうした異なる色を用いながら曲を生み出していきたい。

成層圏の輝きを反射した夕方の空を表現する際に、まずはそれ全体を眺めた時に感じる感覚を何かしらの調によって表現していく。そこからは、時間の移り変わりによって変化する空の表情を様々な調を用いて表現してもいいし、自分自身の感情の移り変わりを様々な調によって表現しても良い。

あるいはある一点の時刻において空を描写する際にも、空の色の違いを異なる調を用いることによって表現できるだろう。このように、転調の技術を活用していけば作曲上の表現の幅は格段に広がるように思える。

また、夕食前に作曲理論に関する書籍を読んでいると、調の重力関係に関する記述があり、大変 興味深く思った。例えば、長調からシャープ系の調に転調する際には、重力に逆らうような力が働 き、一方でフラット系の調に転調する際には、重力に沿って自然に下に進む感じがあるという解説 は面白い。明日の作曲実践の際に転調を活用する時に、その点についても意識をしようと思う。

それともう一点、音楽理論とはつまるところ、美しく響く音を探究した理論体系だと思うのだが、美しい響きに関してはある一定程度の普遍的な感覚が私たちに備わっていながらも、当然ながら何を美しいと思うかは人によってかなり差があるということを改めて思った。興味深い出来事として、現在作っている曲はどれもMuseScoreのウェブ上で共有しているのだが、「これはいまいちだな」と思った曲に対して、どこかの国の人が賛辞のコメントを送ってくれていることが何度かある。

自分にとってはあまり綺麗な響きではなく、全体として味気ない曲だなと思っていたものが、他人にとってはそうではないことがあるのだということを知る。おそらくそれとは逆に、自分がいいと思った曲に関しては、他人の人は何も感じないということもあるのだろう。人の美的感覚とはつくづく面白いものである。そこにはやはり個性のようなものが隠されている。フローニンゲン:2018/12/12(水)19:43

3516. 大きな滝に向かう夢

今朝は六時に起床し、六時半から一日の活動を始めた。辺りは闇と静寂さに包まれている。

早いもので週末まであと二日になった。今日と明日が終わると、再び土日がやってくる。一日一日 が着実な進行と共に過ぎ去っていく。

今日の最高気温は3度、最低気温はマイナス2度になるようだ。確かに外の気温は低いのだが、室内にいると全くそれを感じさせない。オランダの家の暖房設備はしっかりしている。

いつもと同じように、今朝方の夢について振り返ることにする。夢の中で私は、大きな滝が眼下に見える山道を歩いていた。周りを見ると、何人かの友人がいた。どうやら私たちは、山道を下り、眼下に見える滝に向かっているようだった。

山道を下っていると、そういえば以前私はここを訪れたことがあることに気づいた。その際は、ある映画に出演しており、映画の一場面を撮影するためにこの滝を訪れたのであった。その映画では、眼下に見える大きな滝の滝壺に飛び込んでいく派手なシーンがあった。滝壺に飛び込んでいくと、実はその先には次元をワープする空間があり、その空間内で巨大な恐竜と対峙するというシーンがあったことを思い出す。

改めてそのシーンを思い出してみると、それは緊張感と興奮をもたらすシーンであった。そのようなことを思い出しながら山道を下っていると、徐々に滝が近づいてきた。そこで私は、あることに気づいた。

私:「あれっ。これ自分のリュックサックじゃないな」

友人:「どうしたの?それ別の人のリュック?」

私:「うん、そうみたい。ちょっとまずいな」

友人:「引き返す?」

私:「そうした方が良さそうだね。引き返してこのリュックを返し、自分のリュックを持っていくことにするよ」

どうやら私は、別の友人のリュックサックを持ってきてしまったようだ。自分のリュックサックは黒色であり、間違えて持ってきたリュックサックも同じ色をしていた。私は来た道を急いで引き返すことにした。一緒に山道を下っていた友人には、先に滝に向かってもらうことを告げた。

リュックサックを含め、諸々の荷物を置いておける休憩所まで引き返すと、そこに小学校時代の女性の友人が二人いた。彼女たちはなにやら楽しげに談笑している。

私:「リュックサックを間違えてしまったんだけど、自分のリュックがどこにあるか知ってる?」

女性の友人:「あそこにあるよ」

一人の友人は机の上を指差してそのように述べた。見ると、それは確かに自分のリュックサックだったのだが、リュックの表面に白い紙が貼られており、別の友人の名前が書かれていた。それは私のリュックサックに違いはないのだが、どこかの誰かが別の友人のものだと誤解したようだ。リュックサックを開けてみると、やはり私の所持品が入っていた。表面の白紙を剥がし、その場にいた二人の女性の友人に別れを告げてから、私は再び休憩所を後にしようとした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/13(木)06:53

No.1477: Time for Morning Coffee

I finished making coffee. I'll start today's work from now. I'm convinced that today will be fulfilled. Groningen, 08:14, Friday, 12/13/2018

3517. 宙に浮き、木の壁と遭遇する夢

時刻は午前七時を迎えた。ちょうど今、一日分のコーヒーを入れている最中であり、コーヒーメーカー が音を上げながら働いている。

正確にいつだったのかは過去の日記の日付を確認してみる必要があるが、ある日を境目に、夢を毎日見るようになり、しかもそれは文章として書き留められるほどの鮮明な記憶を伴うようになった。

自分の無意識の世界では、いったい何が起きているのだろうか?また、いったい何が起こったのだろうか?

何か非線形的な出来事が無意識の世界で起こったように思えて仕方ない。その出来事が、毎晩記憶に残るような夢を見せているように思える。いずれにせよ、私にできることは、そうした夢を書き留めておくことだけだ。以前の日記で述べたように、夢を書き留める過程の中で大きな自己発見をすることがあり、また、後々になって書き留められた夢を眺めると、そこでも大きな自己発見を得られる

ことがある。そうしたことから、夢を見て、それが記憶に少しでも残っているのであれば、それを書き 留めることを継続していきたいと思う。

そういえば、今朝方は先ほど書き留めた夢以外にも、あと二つほど小さな夢を見ていた。夢の中で 私は見覚えのない都市にいた。その都市には、それほど高い建物はなかったが、その代わりに高 速道路が走っていた。私はその都市の中心部にいて、都市の上を通っている高速道路を下から仰 ぎ見ていた。

周りを見渡すと、辺りはもぬけの殻であり、人は私だけである。しかし私は、そうした状況に対して特に何の感情も感じず、辺りを散策してみようと思った。そこで私は、空を飛んでこの都市を巡ってみようと思った。体を宙に浮かせ、平泳ぎの手かきのような仕草を上方向に行うと、体がどんどんと宙に上がっていった。

ある程度の高度に達したところで空をゆっくりと飛び始めた。すると目の前に電線があり、それにぶ つからないように高度を調節しようと思ったところ、眼下に不思議な光景を見た。

そこには、木の壁があった。大量の葉っぱが茂った無数の木が、まるで壁のように立っていたのである。とても興味深く思った私は、高度を下げ、木の壁の前に降り立った。茂った無数の葉っぱが、どこか途轍もないエネルギーを発しているように思えた。

なんとも言えない深い緑を体現した葉っぱが穏やかな風に揺れている。

目の前にある無数の木は、それらが一体となって壁を作っていることは確かだが、それ以上に驚いたのは、それらが発しているエネルギーまでもが壁を作っているかのようだった。「壁」というよりも、むしろそれは「結界」と表現した方がいいかもしれない。私はその結界の中に入り、一歩一歩木に近づいていった。あるところまで歩み寄ると、私はもう一度上空からこの木の壁を眺めたいと思った。そのため、再度ゆっくりと浮上することにした。そこで夢の場面が変わった。

この夢は、宙に浮かび、少しばかり飛行する内容だった。空を飛ぶという行為も、私の夢の中で時々現れる。おそらく、高度の程度によって示唆している事柄が異なるのだと思う。今朝方の夢の中では、高度は高くなく、飛行に伴う恐怖心は一切なかった。とても自然な形で宙に浮き、ゆっくりと飛

行を楽しむ自分がいた。それにしても、あの木の壁は不思議な存在であった。生い茂る葉っぱは美しく、そしてあの結界的なエネルギー場の力について再度思いを巡らせている。フローニンゲン: 2018/12/13(木)07:17

No.1478: A Merry-Go-Round at Dusk

I feel that today is approaching the end when it becomes dark in the evening. Both Saturday and Sunday will be full of joy and bliss. Groningen, 17:54, Friday, 12/14/2018

3518. 角度を求める問題に解答しようとする夢

これからゆっくりと一日の活動を始めていこうと思う。早朝の作曲実践では、昨日に学んでいた転調の技術を活用していきたいと思う。今のところの考えとしては、少しばかり距離が遠い調にあえて一気に転調させてみて、その転調効果はいかほどかを確認したい。ある調から別の調に転調する際には、その組み合わせに応じて生み出される雰囲気が異なるはずである。そうした差異を一つずつ自分で検証していく。

読み進めている理論書には、フラット系へ転調する際には、重力に沿って自然に下に落ちる感覚があると書かれていたことを思い出し、少しばかり遠い距離にあるフラット系の調に転調させる時に、その落下度合いがどれほどかを確認してみたい。

早朝の作曲実践が終われば、引き続き転調についてまとめノートを取っていく。転調に関する章は分量が多いが、今日中に本章を読み終えることができればと思う。昨日に引き続き、今日も午後から協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがある。そのため、昼前に素早く買い物に出かけ、昼食をいつもよりも少し早めに済ませておきたい。探究活動、創造活動、協働プロジェクトなど、諸々の事柄を着実に進めていこう。

一日の活動を本格的に始めていこうと思った矢先、先ほど書き留め忘れていた夢について思い出 した。それは今朝方見ていた最後の夢である。夢の中で私は、自然の中にある合宿所のような場所 にいた。それは中学校の宿泊訓練のようだった。私は、合宿所内の教室のような場所にいて、多く の友人たちと一緒になって、そこで数学の授業を受けていた。教壇に立っていたのは、私たちが実際に教えてもらっていた女性の数学教師だった。

先生は、宿題として出していた問題の答え合わせをしようと述べた。先生から答えを述べるのではなく、生徒に黒板に回答を書いてもらい、それについて生徒自身が解説をするようにお願いをしてきた。それらはどれも難問だったらしく、周りにいた生徒たちは誰一人挙手をして解答しようとしない。そこで私は、「いつもだったら挙手をしても当てられないのですが、今日はどうだろうと思って挙手してみます」と笑いながら述べ、挙手をした。

すると先生は、「いつも当ててあげてるわよ」と笑いながら述べ、私を指名した。

私:「最初の5問は、実はそれほど難しくないと思うので、別の人に任せます」

先生:「そうね。じゃあ、最初の5問はA君にお願いしようかな」

先生はそのように述べて、A君を指名した。A君は比較的数学ができる方だったから、彼であれば問題ないと私は思った。

彼が最初の5問を板書している間、私は自分の机の上に置いてあった一枚の紙を眺めた。それは、 今回の問題の解答とそのプロセスを書き留めているものなのだが、それを見た瞬間、どうも解答プロセスがあまりにも簡潔であることに気づいた。

出題された問題は幾何学に関するものであり、より具体的には平行線と三角形の性質を用いながら角度を求めていくような問題だった。一人の小柄な友人が私の方に近づいてきて、「どうやって問題解いたの?ちょっと教えてよ」と述べた。私は目の前の紙を広げながら、彼に問題の解き方を教えてあげようと思った。彼は広げられた紙を見て、「えっ、こんなにシンプルなの?」と述べ、驚きの表情を浮かべていた。

実は自分でもなぜこれほどまでに解答プロセスがシンプルなのかわからず、いざ友人に解説をしようと思っても、思考があまりうまく進んでいかない。そこでふと、どうやら私は、解答集の解答だけを単にその紙に書き写しただけだということに気づいたのである。それに気づいた瞬間に黒板の方を

見ると、A君が5問目の解答を書き終えようとしており、自分の解説の番が迫ってきていた。私は急いで残り5問をその場で考え直し、模範解答で省略されている諸々の思考プロセスを一気に自分で埋めていくことにした。少々焦りの気持ちが湧き上がってきたところで夢から覚めた。フローニンゲン: 2018/12/13(木)07:45

3519. オランダ人にとっての絵画

時刻は午後の四時を迎えた。今、書斎の窓を通じて、薄赤紫色の美しい夕日を眺めている。この季節のフローニンゲンにおいて、私が一番好きな時間帯は、太陽の光を浴びれる日中よりも、美しい夕日を眺めることのできるこの時間帯だと言えるかもしれない。こうした夕日は、東京では見られないし、米国に住んでいた時にも見たことがないように思う。実家のある山口県では、こうした赤紫色のなんとも言えない夕日を何度か拝んだことがあると記憶している。夕日があのように美しい色を見せるのは立地条件とも関係しているのだろう。

薄赤紫色の空が遠くに見え、その上空の淡い青色の空には一つの飛行機雲が輝いている。

今日もこれまでのところ、本当に充実した時間を過ごせている。転調に関する学習も進み、少しず つその技術の理解を深めている。これから、久しぶりにバッハの変奏曲に範を求めて作曲をしようと 思う。その際に、本日学んだ転調技術のいずれかを試してみたい。

学習即実践、実践即学習の精神を忘れないようにする。学習だけをする人、実践だけをする人は 熟達の道を歩めない。仮に幾分歩めたとしても、いつか必ず足を踏み外し、そこで大きな停滞を経 験するはずである。とにかく学習と実践。両者をこれからも続けていく。

今日は昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけた。その帰り道にふと、オランダのどの家にも ほぼ必ず何かしらの絵画作品が壁に掛けられていることについて改めて考えていた。

今私が住んでいる家は家具付きであり、リビングに三枚、寝室に二枚の絵画が備え付けられている。 リビングに掛けられていた絵画のうち、二枚を取り外し、自分が所持しているニッサン・インゲル先生 の絵画作品二枚と取り替えている。もう一枚ほどインゲル先生の作品を持っているが、それは壁に 掛けることができず、ソファの上に立てかけてある。備え付けの絵画を含めると、今私は、合計で八 枚の絵画に囲まれて生活を送っていることになる、ということに改めて気づいた。このように自宅に 絵画作品を飾っているというのは、オランダでは日常茶飯事の光景である。

オランダのレンガ造りの家々は面白い構造になっている。いや、構造というよりも、オランダ人のプライバシーの概念と日本人のそれが幾分異なるのだろうか、通りを歩いていると、レンガ造りの一階の家の中は大抵丸見えである。もちろん薄いカーテンを閉めている家もあるが、だいたいの家は中の様子がわかる。スーパーの帰り道に、近所の住宅地を通りながら家々の中に目をやると、やはり大抵の家に絵画作品が飾られていることに改めて気づいた。

オランダ人にとって絵画とはどのような存在なのだろうか?という問いを考えてみた。彼らにとっては、 絵画というのは本当に身近な存在なのだろう。絵画は生活に密着していて、オランダ人は、絵画な しではどこか生活に彩りが欠けてしまうと感じるのかもしれない。日本人にとってそれはなんだろうか ということを考えていたが、すぐに良いものが思いつかなかった。

「醤油」と「浴槽」の二つが思いついたが、日本人にとってのそれらと、オランダ人にとっての絵画との間には、どこか感覚的に差があるように思え、それら二つはあまり良い例ではないだろう。オランダ人の友人に、「オランダ人にとっての絵画は、日本人にとっての~かもしれないね」ということを伝える機会がありそうであり、その時までに該当物を探しておきたい。日本人にとって、生活に彩りをもたらし、生活に密着しているものには何があるだろうか?フローニンゲン:2018/12/13(木)16:27

3520. オリエンテーションに参加する夢

今朝は五時半に起床し、六時から一日の活動を始めた。今日も作曲理論の学習を旺盛に進めていこうという気力に溢れている。昨夜の就寝前からすでに今日の日の学習を楽しみにしていたこともあって、早朝から気力が満ち溢れているのだろう。

起床して天気予報を確認してみると、今日は最高気温が2度、最低気温はマイナス3度とのことである。不思議なことに、午前六時の気温は2度であり、ここから昼食に向けて気温が下がる。正午あたりでマイナス1度になるようだ。そこから日中で一番気温が高くなる午後三時や四時の時間帯には1度になるという予報が出ている。今日は行きつけのチーズ屋に行きたいと思っていたため、少々外

気は冷たいが、一番気温が高くなる午後三時あたりに散歩がてらチーズ屋に足を運ぼうと思う。そ の際はマフラーと手袋を忘れないようにする。

起床直後の歯磨きとヨガの実践と同じように、夢を振り返ることが完全な習慣になりつつある。今朝 方もいくつか印象に残る夢を見ていた。

夢の中で私は、自宅にいた。それはオランダの今の家ではなく、小中学校時代を過ごした社宅だった。リビングのソファを見ると、母が寝ている。母に声をかけると、どうやらあまり体調が良くないらしい。そこで私は、「リビングのソファで寝るのではなく、寝室で寝たほうがゆっくり寝れるのではないか?」と述べた。すると母は、「そうするわ」と述べて、ゆっくりとソファから起き上がり、寝室の方に向かった。

リビングがとても静かである。特にすることもなかった私は、ソファに腰掛けてゆっくりしようと思った。 すると、突然睡魔が襲ってきて、今度は私がソファで横になることになった。意識が完全に眠りに落 ちようとしている時に、これでは参加予定の授業に間に合わないかもしれない、と思った。

私はこれから大学の授業に出る予定があり、今ここで寝てしまうとその時間に間に合わないかもしれないという考えがあった。しかし、睡魔に勝つことはできず、私は完全に眠りの意識に落ちた。

そこから数時間ほど眠ったであろうか、再び目をさますと、時刻は午前11時に近づいていた。参加 予定の授業の開始は11時であったから、今から出かければなんとか間に合うかもしれないと思った。 急いで支度をしようと思った瞬間に、私はすでに大学にいた。どうやらそこはアメリカの大学院のよう だ。その大学院の設立自体は古いのだが、キャンパスは新しく見える。私はキャンパスの中に入り、 大きなインフォーメーションスクリーンを見上げ、これから行われる授業の教室を確認した。厳密に は、これから始まるのは授業ではなく、その授業に関するオリエンテーションである。どうやら私は再 びアメリカの大学院に通うことになったようであり、ちょうど今はオリエンテーションの時期だった。

履修したいと思っていた授業は教育哲学に関するものであり、その授業が行われる教室に向かった。なんとかオリエンテーションの開始に間に合いそうだと急ぎ足で教室に向かったが、なかなか教室が見つからない。

ちょうどロビーのソファに一人のアジア系の男性が腰掛けており、彼に教室の場所を尋ねてみた。 親切にも教室を教えてもらったところ、なんと私たちの目の前の教室が目的の場所だった。

「4番教室」と表示された扉は閉まっており、オリエンテーションが開始されると、もう教室の中に入ることができないらしかった。そのオリエンテーションは45後にもう一度行われるとのことであったから、私は別の教室でどのような授業のオリエンテーションがされているのかを見るために、建物内をぶらぶらとすることにした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/14(金)06:34

No.1479: Cheerfulness & Kindness

Saturday began with silence. This morning seems to have cheerfulness and kindness. Groningen, 10:08, Saturday, 12/15/2018